

情報文化学会 第2回全国大会 報告要旨

情報文化論の萌芽

— 小島勝治のめざしたもの —

岡山大学 橋本 勝

小島勝治（1914～1944）は、若くして戦地に散った統計学徒である。しかし、彼がその短期間に残した業績は、今日の研究者の常識では考えられない膨大なものであり、しかも、民俗学の素養と統計実務者という立場を生かした独自の視座から展開する、彼の「統計文化論」は情報文化論の一つの先駆的研究であると同時に、現代にもそのまま通用する主張を数多く含み、極めて現代的意義の大きいものといえる。

今回の報告は、彼の人物像と彼の「統計文化論」の概要を紹介することによって、情報文化論の今後の一つのあり方を模索しようとするものである。

I 略年譜

- 1914 大阪にて出生。
- 1933 旧制中学卒業。伊勢の神宮皇学館の特待研究生となる。
- 1934 村社五条宮勤務。民俗学に興味をもち、翌年2月『土と史』発刊。
- 1935 五条宮退職。布施市役所勤務。10月より統計業務に従事。
- 1936 日本大学大阪専門学校商科入学。
- 1937 統計学・統計史専攻を決意。
- 1938 大阪統計懇話会を設立。
- 1939 日本大学大阪専門学校卒業。10月、布施市役所を退職。㈱弘済会勤務。
- 1941 教育召集。
- 1942 応召。
- 1944 中国にて戦病死。（享年29歳）

II 主要著作

いずれも彼の死後、約30年を経て、友人たちの手によって遺稿集として出版されたもの。

- a. 日本統計文化史序説 1972 未来社
- b. 統計文化論集 I～IV 1981～ 未来社
 - a. は彼の代表的な2つの長編論稿「中世日本における統計思想の発生および統計学の成立にいたる序史」「日本統計文化史序説」を収録したもので、出版当時、NHKの教養特集で小島がとりあげられたこともあって、70年代の「小島ブーム」の契機になったものである。
 - b. はa. 以外の統計学関係の遺作を整理・出版したものであるが、彼の独創的研究を基礎づけ、また補完する重要な論稿を数多く含んでいる。

III 小島の統計文化論

小島統計学を語る場合、柳田民俗学の影響に触れないわけにはいかない。すなわち、柳田国男が彼の民俗学において、特に重要視したのは、外国文明の影響によって変化をみせない純日本的な文化や伝統芸能の存在であったが、小島もまた、輸入学問としての統計思想・統計学が日本に根づき成長した根元力なり地盤なりを日本民族固有の統計的素地に求めようとする。彼が古代から近世に至る日本の統計思想を探究することを主要研究テーマとした所以もまさにここにあるといつてよい。例えば、

- * 風土記における実証観察的数量記述
- * 三善清行の意見封事十二条にみられる統計的議論
- * 室町期以降に盛んに刊行された名数書にみられる名数思想
- * 江戸期に実用学として発達した米相場の統計的予測論
- * 二宮尊徳らの藩政改革にみられる統計的判断による平均思想の実践

などは、いずれも西欧の統計学・統計思想の発展とはほとんど無縁に日本独自に発達したものであり、小島はこれらを丹念に詳察することによって上記の考え方に到達していく。そして、これらが、ある時は呪術的信仰と、またある時は儒教的大数思想との葛藤を重ねながらもしだいに日本社会に、したがってまた日本人に定着していったという経緯があったればこそ、幕末期にstatisticが実用学問として輸入された時に、それが比較的スムーズに受容され得たのだという、彼の主張はかなりの説得力をもつ。

報告者はかつて愚稿の中で「文化」の意味を検討したことがあるが、cultureがcultつまりinterestに対する一般大衆の行為・行動によって成立する、という語源的な意味からも、文化における一般大衆・民衆の果たす役割は大きく、この点からみて、小島の視点は極めて重要なものといえる。小島は、戦地から友人にあてて書いた最後の軍事郵便はがきでも、当時の統計文化が日本固有の伝統的な統計思想に根づいたものではなく、一種の流行にすぎず、これを打破しない限りは民衆を統計に近づけ、真の統計文化を民衆の手で築きあげることはできない、と主張している。彼のこうした鋭い指摘は、民俗学と統計学の学際的立場に立ち、あらゆることに貪欲な関心を示した彼だからこそ成しえたものであるといつてよい。

IV 統計と情報

小島の時代、情報といえば一般に「諜報」の意味合いが強く、現代人が幅広く用いている情報という用語の使い方はほとんどみられなかったし、小島自身が統計関係の実務に携わっていたこともあって、小島の文章には情報という用語は登場しない。しかし、彼が統計文化と呼び、考察を深めたかったものは、まさに情報文化そのものなのではなかろうか。例えば、次の一節をみてみよう。

ひとは農耕の文化が天文学を生み、航海術が数学を生んだという時間、空間の制約から超越した文化起源説を、統計文化の領域にもおしひろげて、政治、徴税、軍事に関連して統計調査が発生し、さいころの遊戯が確率理論を生んだとし、両者の概念上の安易な結合から統計理論の生成を説こうとしている。このような実際生活上の必要は文化ないし科学の理論を生む動機とはなるが、学問の個的性格をつくるものではな

い。(中略)統計文化はみずからの統計的な世界観を客観化したものである。統計的意識、統計的心理、統計的思想をふくむ精神は内的ではあるが客観的に形成せられたときに自己を統計的文化として表現する。本来たんなる生活の必要を動機として生まれた統計的社会的関係は實際上に必要な限度の知識や技術を過不足なくもっているにすぎない。

これは、小島が「日本統計文化史序説」の結論部分で学問と文化の関連を整理している部分であるが、要するに彼のいわんとするところは、現実の必要性が統計調査や統計理論を生み出したのだとしても、それを精神活動として、したがってまた文化としてながめる場合には、そうした現実の必要性は、統計文化成立のための十分条件ではあるが、必要十分条件ではないということである。

同様なことは、現実の必要性が情報活動あるいは情報化の進展を促進したことと情報学や情報理論がそれを追いかける形で形成されてきたという状況でもよくあてはまる。すなわち、例えば、50年代に世界で初めてマッハルプが「知識」とは何かを追究し、その生産・流通を定量的に分析したとき、少なくともアメリカ社会においては知識産業の国内に占める規模はGNP比で30%を占めていたのであって、情報化社会はすでにある程度進行しつつあったといっていよい。その結果、さまざまな情報学理論の大半は、いかにしたら大量の情報を正確により速く伝達しうるか、という技術的視点と情報化が企業活動なり産業構造なりをどう変化させているか、という社会的視点に集中したのである。つまり、なぜ人々は情報化を受け入れたのか、あるいは、情報化は人々の思考・行動様式をどう変えつつあるのかという文化的視点はこれまで、最も不足していた分析視角なのである。小島流に言えば、「情報文化は大衆自らが情報的な世界観を客観化したもの」なのだとすれば、さまざまな情報活動そのものを文化的視点によってあらためて捉え直す意義は極めて大きい。

統計はそれ自身が数量的集団情報であるが、今日においては、それを生産すること自体が情報活動の重要な一側面でもあり、その意味で情報の性格を最も典型的にもつものである。したがって統計および統計活動の分析は情報文化論の重要な構成要素といえよう。

今井賢氏が例えば本学会誌第1号で指摘している通り、新しい学際的学問領域の形成を目指す「情報文化」には、幾つかの柱となる理論の出現が待たれている。とすれば、小島が統計文化というタームで我々に語りかけている内容は、少なくともその理論の1つを示唆しているのではなかろうか。

〈参考〉；小島研究・紹介の論稿

- * 杉原四郎「小島勝治と『浪華の鏡』」(『未来』第73号)
- * 吉田光邦「若々しい思考のあと — 統計文化史研究の一里塚 —」
(『週刊読書人』1972. 10. 23号)
- * 北島正元「日本的数理観念の形成過程 — 小島勝治と『日本統計文化史序説』 —」
(『朝日ジャーナル』1972. 11. 17号)
- * 藪内武司「小島勝治著『日本統計文化史序説』書評」(『統計学』26号)
- * 竹内啓「社会思想としての統計学発達史 — 小島勝治著『日本統計文化史序説』書評」
- * 橋本勝「小島勝治著『統計文化論集I』書評」(『統計学』44号)